

接続助詞「と」の淵源

—同時の意を表す「と等しく」はなぜ「に等しく」でなかったか—

陳 星宇（名古屋大学大学院生）

1. はじめに

順接条件を表す接続助詞「と」の成立過程において、平安末期から現れた、同時の意を表す「と等しく」という連接形式が重要視されている（岡崎 1980、小林 1996、陳 印刷中）。陳（印刷中）では、この「と等しく」において「と」と「等しく」がそれぞれ変化しただけでなく、その変化は相互に関連しており、共に「と等しく」の固定化に帰着するということが観察されている。しかし、形容詞「等し」は「に」にも「と」にも後続する。にもかかわらず、同時の意を表す接続表現として、「に等しく」ではなく、「と等しく」が固定化した背景や要因はいまだ不明である。接続助詞「と」の源流を「と等しく」における「と」に遡るのであれば、その背景要因を究明しなければ、「と」の成立過程を明確にしたとは言えない。

そこで、本発表では、まず、平安時代において「等し」が取る「に」「と」が使い分けられていた可能性を考える。その使い分けを明確にするために、同時の意を表す「と等しく」以外の「等し」の用例を調査するほか、同じく「[比較対象]（が）[比較対象] {と/に} [比較述語]」という構文を持ち、比較対象の一致を表す「同じ」「似る」、及び、比較対象の不一致を表す「異なり」「劣る」「勝る」を併せて調査する。以下では、まず先行研究を概観し、観察の観点をまとめる（2.1 節）。その観点で「等し」などの比較述語を観察し、従来の観点の限界性を示す（2.1 節、2.2 節）。その上で、本発表の観点を説明し（3.1 節）、本発表の観点から比較述語における「に」「と」の使い分けを解明する（3.2 節）。最後に、同時の意を表す「と等しく」の様相を再度検討し、その位置づけを考え直す（4 節）。

2. 従来の観点からの観察

2.1 先行研究と観察の観点

平安時代の比較述語が取る格助詞「に」「と」について、先行研究は、それぞれの意味・用法と例文を列挙するものがほとんどであり（山田 1913:332,344、小田 2015:379,390）、「に」「と」の違いに言及していない。山田（1936）と鈴木（1975）は、比較述語を直接の考察対象とする論考ではないが、「に」「と」の違いを論じている。

山田（1936:431）では、「父とあがむ」においてあがめられる人は実際の「父」ではないとして、「と」は「状態の如き外的の変更」を示し、「相対的のもの」に使用すると述べている。それに対し、「親になる」の場合には、実際にそうなるとして、「に」は「性質の変化の如く専ら内面的の事情」を示し、「絶対的のもの」に使用すると述べている。山田（1936）は、変化を念頭におき、実際の変化の有無によって「に」「と」の使い分けを説明している。しかし、「等し」をはじめとした比較述語は、状態や性質を表し、いずれも「静的」な語である。そのため、変化を含まない比較述語を分析するにあたり、変化に基づいた観点をそのまま用いることには限界がある。鈴木（1975）も変化に注目する研究であるが、その用法分類では「ニ（ト）ナル」の前接部分が示されている。そこから、「実質的用法」¹では、格助詞の前接部分は人物（太政大臣、親、大人）や事物（灰、酔ひ、くさはひ）を表す名詞であるのに対し、「形式的用法」では、数量（二三日、二）、程度（～程）、時間（二月、明後日）、

¹ 鈴木（1975）では「なる」が実際に「変わって生じる」という意味を表すかどうかを基準に、「実質的用法」「形式的用法」を分類している。

空間（坂本、身の上）を表す名詞であるという傾向があることが分かる。平安時代において「ニナル」は「実質的用法」にも「形式的用法」にも用いられるが、「トナル」は特殊の場合を除けば、殆ど実質的用法にしか用いられないという鈴木（1975）の指摘を踏まえると、「に」は、人物や事物を表す名詞にも、数量、程度、時間、空間を表す名詞にも後続するが、「と」は、ほとんど人物や事物を表す名詞のみに後続する、という使い分けが見出せる。

では、比較述語が取る「に」「と」の場合、このような相違が見られるであろうか。2.2 節では、この観点から格助詞の前接部分を見る。

2.2 格助詞の前接部分の様相

平安時代における「等し」「同じ」「似る」「異なり」「劣る」「勝る」の用例を調査した結果²、全ての比較述語に「に」の例があるが、「と」の例が複数あるのは「等し」「同じ」だけであった。「異なり」「劣る」「似る」には1件のみがそれぞれ存在する。「勝る」には「と」の例がない。そのため、「に」「と」の使い分けを探究するにあたり、以下では、「に」「と」両方の用例が複数ある「等し」「同じ」の様相を中心に見ていく。

「等し」と「同じ」の「に」「と」の直前に現れる要素の実例を観察すると、「等し」「同じ」とも、前述の観点のうち、人物と事物のみが見られ、数量、程度、時間、空間は見られなかった。「等し」は表1、「同じ」は表2の通りである。

表1 「に/と等し」の前接部分の実例と数量

助詞	人物	事物
に	合計：7 弥行、よからぬ子ども、如來、七夕 つめ、一条殿、三十三天の微妙の天 女、中納言殿	合計：5 むかしの故朝臣の仕うまつられし 手、御衣の裾、十方の恒河沙、桂の 裾、ありつる法の師の覚え
と	合計：21 わが君、人*5、侍従の君、かの侍従 の君、仲忠が祖、仲忠の朝臣、弥 行、藤中将、いぬ宮、われ、后*2、 思ふこといはでぞただにやみぬべき われ、遜位の帝、太上天皇、ただ 人、帝	合計：16 天、南、丈*2、棟、わが弾く手、涼 に賜ひつる琴、はし風（琴の名）、桂 の裾、後ろ、小桂、たとへくる露、 こと木ども、さ水、地、軒
合計	28	21

表2 「に/と同じ」の前接部分の実例と数量

助詞	人物	事物
に	合計：13 この監、大臣の君、まこと（実の 子）、白川の大員、西三条大臣、本院 の大員、枇杷大臣、九条殿、一条撰 政、これ（春宮大夫頼宗）、三ところ （他の三人の客人）、御供の人、涼	合計：5 ひざう（非常）、常、棚一つ、今、初 霜
と	合計：6 亡き人、大夫殿、かの人、このいぬ 宮、尚侍の殿、法師	合計：3 はじめのそへ歌、右大将のさま、今 の世のこと
合計	19	8

※「*」に後続する数字はその例の件数を示す。

表1の「と」の「事物」の欄には「南」「後ろ」のような空間を表す名詞があるが、例（1）（2）に示すように、「南にある物（町や木）」「背丈」をそれぞれ指している。また、表2の

² 具体的な調査方法や検索条件を末尾の「使用データベース・テキスト」に示す。

「に」の「事物」の欄に「常」「今」のような時間を表す名詞があるが、例 (3) (4) に示すように、「常のこと」「今のもの（大海の摺裳、織物の唐衣など）」をそれぞれ指している。以上のことから、そのような時間や空間によって事物を指す例を「事物」に分類した。

- (1) 宮より北面、大きな山のほとり、山より下まで常磐の木、色を尽くしたり。町のほど、木の数、**南**と等し。（うつほ物語〔九〕新全集 p.397）
- (2) 御額髪のゆらゆらとこぼれかかりたまへるに、裾はやがて**後ろ**と等しく引かれゆきて、（狭衣物語 巻一〔二三〕新全集 p.57）
- (3) **常**に同じことのやうなれど、見たてまつるたびごとに、めづらしからむをばいかがはせむ。（20-源氏 1010_00010 162160）
- (4) 女房の同じき大海の摺裳、織物の唐衣など、昔より**今**に同じやうなれども、これはいかにしたるぞとまで見えける。（栄花物語 巻第六 新全集 p.303）

表1と表2から、「等し」の場合にも、「同じ」の場合にも、人物、事物を表す例があり、数量、程度、時間、空間そのものを表す例がないことが分かる。つまり、「に」は、人物や事物を表す名詞にも、数量、程度、時間、空間を表す名詞にも後続するが、「と」は、ほとんど人物や事物を表す名詞のみに後続する、という鈴木（1975）で見られた使い分けは、比較述語においては見られないのである。

3. 本発表の観点からの観察

2節では、先行研究を検討し、その観点は比較述語における「に」「と」の問題を解決するにあたっては限界があることを示した。では、比較述語において「に」「と」はどのように使い分けられているのだろうか。この節では、新たな観点を導入する。

3.1 観察の観点と用法分類

2.2節では、比較述語の中で、「と」の例が複数あるのは「等し」「同じ」だけであることが分かった。これは平安時代における「等し」が取る格助詞を研究するにあたり、「等し」のみを観察するのでは十分でなく、他の比較述語の中に位置付けて見ることの重要性を示唆している。

一方、「等し」と「同じ」の用例に「に」「と」の例が共に存在することは、「等し」と「同じ」自身の用法によって「に」「と」が使い分けられている可能性を示唆している。そのため、個々の比較述語自体の用法にも注目する必要がある。観察対象となる比較述語には形容詞、形容動詞、動詞がある。このような性質の異なる形式を比較するために、文中の修飾関係に注目して、「に」「と」に後続する各比較述語の全用例を3種類に分類した。以下、それぞれ用例に即して詳しく説明する。

例(5)では、比較対象として「十方の恒河沙」を「に」で標示し、「十方の恒河沙に等しき」の修飾によって「諸仏の国土」の数量（多さ）が示されている。例(6)～(10)も同じく比較述語を含む句によって後続部分が修飾されている。本発表では、このような、比較形式が後続部分を修飾する用法のうち、修飾先が体言である用法を「連体修飾用法」と呼ぶ。

- (5) 大光明を放ちて、周遍して王舎大城と此の三千大千世界と、十方の恒河沙**に等し**き諸佛の国土とを照耀したまふ。（20K 西金 0830_01002 6760）
- (6) むらさきのゆゑに心をしめればふちに身なげん名やはをしけきとて、大臣の君**に同じ**かざしをまゐりたまふ。（20-源氏 1010_00024 19680）
- (7) 花にあかぬ嘆きはいつもせしかども今日の今宵**に似る**時はなし（20-伊勢 0920_00001 69240）
- (8) 起居のけはひたへがたげに行ふ、いとあはれに、朝の露**にことならぬ**世を、何をむさぼる身の祈りにかと聞きたまふ。（20-源氏 1010_00004 85200）

(9) すゝ虫におとらぬ音こそなかれけれ昔のあきを思ひやりつゝ (20W 後撰 0955_18 018 20680)

(10) 「このごろの風にたぐへんには、さらにこれにまさる句ひあらじ」とめでたまふ。
(20-源氏 1010_00032 21610)

一方、例 (11) ～ (15) では、比較述語を含む句によって修飾された後続部分是用言である。本発表では、このような、後続部分を修飾する用法のうち、修飾先の後続部分が用言である用法を「連用修飾用法」と呼ぶ。

(11) これは、北の方の御私物。綾、錦、絹、綿、糸、縑など、棟と等しう積みて、取り納めぬる蔵なり。(うつほ物語「一三」新全集 p.415)

(12) 『いまだ三十の期におよばず』といふ詩を、さらにこと人に似ず誦じたまひし」など言へば、(20-枕草 1001_00155 22990)

(13) いとどしう春雨かと思ゆるまで、軒の雪に異ならず濡らしそへたまふ。(20-源氏 1010_00036 167940)

(14) いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らずいかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる。(20-源氏 1010_00015 44060)

(15) 親にまさりてあはれに、とざまかうざまにいたくよろしうなさむと思したる、限りなくうれしきこと。(20-落窪 0986_00004 103640)

例 (5) ～ (15) と異なり、例 (16) ～ (18) では、比較述語は全て完結した文の述語である。また、例 (19) では「髪丈と等しくて」と「年十五歳より内なる」は並列関係にはあるが、修飾関係にはない。例 (20) では、「世の人に似ぬ」に接続助詞「を」がついており、それによって後続節との関係が表されている。例 (16) ～ (20) のような例では、比較述語が単に述語として機能することで一致している。本発表では、前述した 2 つの「修飾用法」と対比して、このような用法を「非修飾用法」と呼ぶ。

(16) 宮より北面、大きな山のほとり、山より下まで常磐の木、色を尽くしたり。町のほど、木の数、南と等し。(例 (1) の再掲)

(17) これかれも、さまざま劣らずしたまへれば、時の人のかやうのわざに劣らずなむありける。(20-源氏 1010_00039 227230)

(18) つれなさはうき世のつねになりゆくを忘れぬ人や人にことなるとあり。(20-源氏 1010_00032 85100)

(19) 裕の袴着たる童、髪丈と等しくて、年十五歳より内なる、丈等しく姿同じき十人。
(うつほ物語「一〇」新全集 p.399)

(20) 姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてだにあり、(20-源氏 1010_00009 31760)

3.2 格助詞の後続部分から見た用法別の様相

3.2.1 「等し」と「等し」以外の対立

各比較述語における用法別の「に」「と」の用例数を表 3 に示す。

表 3 各比較述語における用法別の「に」「と」の用例数

比較述語	非修飾		連用修飾		連体修飾		合計
	と	に	と	に	と	に	
等し	9	7	14	3	14	2	49
同じ		6			9	12	27
似る		160	1	89		95	345
異なり		24		11	1	13	49

劣る	1	113		61		57	232
勝る		88		32		48	168
合計	10	398	15	196	24	227	870

※空欄は用例がないことを意味する（以下同じ）。

表3では「同じ」の「連用修飾用法」が空欄となっている。これは、調査範囲において「同じ」の「連用修飾用法」の用例が見出されなかったためである。「同じ」の「連用修飾用法」を除くと、全ての比較述語の全ての用法に「に」の例が見られる。一方、「と」の例となると、「勝る」には見られず、「似る」「異なり」「劣る」には以下に示す例(21)(22)(23)の各1件のみがそれぞれ存在する。この数はそれぞれの合計の用例数と比べると、極めて少ないと言える。

(21)「ただ今は、亡き人と異ならぬ御ありさまにてなむ。渡らせたまへるよしは、聞こえさせはべりぬ」と聞こゆ。(20-源氏 1010_00039 165690)

(22)「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」などのたまへば、(後略)(20-源氏 1010_00022 125170)

(23)かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく似て³、春秋と咲くがをかしきなり。(20-枕草 1001_00065 2050)

それに対し、「同じ」の「連体修飾用法」には「と」の例が9件と一定の用例がある。ただし、「と同じ」が修飾する主名詞は、表4に示すように、「やう」「さま」に偏っている(例(24)(25))。一方、「に同じ」の場合、例(26)のような、主名詞が「やう」の例もあるが、それに偏らず、人、もの、ことなどがあり、多様性に富む。このことから、「連体修飾用法」の場合、「と同じ」の使用は限られており、「に同じ」がより一般的な形式であると言える。

表4 「に」「と」別「同じ」で修飾される主名詞

助詞	修飾される主名詞
に	事、こと*2、心、かざし、大納言、ごと、色*2、轆轤ひきの御器、位、やう
と	やう*5、ほど、さま*2、口

(24) この歌はかくれたる所なんなき、されどはじめのそへ歌とおなじやうなればすこしさまをかへたるなるべし(20W 古今 0905_00001 14660)

(25) 法師と同じさまなる御有様なれど、(栄花物語 卷第二十二 新全集 p.40)

(26) 女房の同じき大海の摺裳、織物の唐衣など、昔より今に同じやうなれども、これはいかにしたるぞとまで見えける。(例(4)の再掲)

一方、「等し」では、例(27)～(32)に示すように、全ての用法に渡って「と」が「に」と同じ構文環境下で用いられている。用例数から見ても、「と」のほうが多い。そのため、「等し」では、[比較対象]を「と」で標示する例がより一般的であると言える。

(27)【連体】大光明を放ちて、周遍して王舎大城と此の三千大千世界と、十方の恒河沙に等しき諸佛の國土とを照耀したまふ。(例(5)の再掲)

(28)【連体】天と等しき水、湛へて浸すとも、一筋流るべからず。(うつほ物語【一】新全集 p.379)

(29)【連用】おとども、「むかしより同じ所にて見たてまつり馴れたれば、よからぬ子

³ 「かにひの花」について、『新全集』の注で「未詳。現在の岩^{がんび}菲の花(なでしこ科)かと言うが、それなら藤に似ていない。ただ、春咲きと秋咲きとがある点はふさわしい」と述べている。これを踏まえると、例(23)において、似ているのは花の様子ではなく、花の咲く季節であると解釈できる。そのため、「似る」を含む句「藤の花といとよく似て」と後続用言「春秋と咲く」との間に修飾関係が認められ、「連用修飾用法」に分類した。

どもに等しくこそ思ひきこゆれ。…」(うつほ物語〔三九〕新全集 p.123)

(30)【連用】髪は少し色にて、さはらかなる下がりばなどあてやかにて、小桂と等しうぞ見ゆる。(うつほ物語 巻三〔一八三〕新全集 p.41)

(31)【非修飾】それを帝聞こしめして、(朱雀)「この遊ばす手むかしの故朝臣の仕うまつられし手に等しくなむありける。(うつほ物語〔三〇〕新全集 p.254)

(32)【非修飾】大将、次に横笛を声の出づる限り吹きたまふ。面白き折に合ひて、あはれすごう、これも世になく聞こゆ。(中納言は)聞き驚きたまひて、笛はむかしわれと等しうこそありしか。(うつほ物語〔二〇〕新全集 p.551)

以上のことから、比較述語において「等し」と「等し」以外の対立が見られる。「等し」では「に」「と」の混用が認められる一方、「と」がより一般的である。「等し」以外の比較述語では、「に」の例がより一般的であり、「と」の例があっても、数が極めて少ないか、限定された条件下で使われている。

3.2.2 「修飾用法」と「非修飾用法」の対立

比率から見ると、「等し」の各用法において「に」「と」の用例分布が異なっている。まず、「等し」の用法別の用例数を表5に示す。

表5 「等し」の用法別「に」「と」の用例数

助詞	連体修飾	連用修飾	非修飾
に	2 (12.5%)	3 (17.6%)	7 (43.8%)
と	14 (87.5%)	14 (82.4%)	9 (56.3%)
合計	16 (100%)	17 (100%)	16 (100%)

※ () 内の数字は用例数の比率である。

表5では、「連体修飾用法」と「連用修飾用法」において「に」の占める割合はそれぞれ12.5%、17.6%であって大差が見られない。一方、「非修飾用法」になると、「に」の割合は43.8%となり、倍以上である。それと対照的に、「と」は「連体修飾用法」と「連用修飾用法」においてそれぞれ87.5%、82.4%を占めているが、「非修飾用法」になると、56.3%に過ぎない。また、「と」の「非修飾用法」の9例中、7例の出典が『うつほ物語』に集中しているが、「に」の場合は7例中、2例が『うつほ物語』である。この作品を除けば、「非修飾用法」における「に」の比率は71.4%に上る。つまり、「等し」の「修飾用法」と「非修飾用法」の間には、「に」「と」の比率の差が認められる。「等し」の〔比較対象〕の標示は、「修飾用法」において「と」の比率が顕著に高く、「非修飾用法」において「に」の比率が高い。

つまり、「等し」の場合、「修飾用法」と「非修飾用法」の対立が見られる。「に」は「非修飾用法」に偏り、「と」は「修飾用法」に顕著に偏る。

3.2.3 「等し」以外の比較述語における「と」の用例について

3.2.1 節では、「等し」以外の比較述語において少ないものの「と」の例が存在することを見た。この節では、そのような例外について説明を試みる。

後世では「と」が用いられるところに、時代を遡ってみると、「に」が用いられていたことが多くの研究で指摘されている。阪倉(1971:18-19)は、「同じ」について「に同じ」のように格助詞「に」を取るのが普通であるが、『古本説話集』に格助詞「と」を用いた例が見え、『徒然草』などには「に」「と」の両形が用いられ、その後「と同じ」が普通になったという。また、鈴木(1975:70)にも、上代から中古にかけて「ニナル」の勢力が「トナル」に侵食されたという記述があった。さらに、此島(1966:80-83)では、「さわさに」「つらつらに」「うらうらに」のような擬声・擬態語を受ける場合や、「雨に降りきや」「あきつ羽に

⁴ 「と」の比率と「に」の比率を合わせて100%を超えているのは、四捨五入のためである。

にほへる衣」のような名詞を受けて状態的に下へ続ける場合、「桜花ふりにふるとも見る人」「ただひえにひえいりて」のような同一動詞を重ねる場合、といった複数の用法で本来「に」だったところが「と」に取って代わられたことが指摘されている。

以上のことを踏まえ、「同じ」「似る」「異なり」「劣る」における「と」の用例も、「に」から「と」への移行という大きな歴史的変化における一現象と位置付けられる。

4. 「と等しく」の位置づけ

以上の使い分けを踏まえ、同時の意を表す「と等しく」の前史に議論を戻す。形容詞「等し」が「に」にも「と」にも後続するにもかかわらず、同時の意を表す定型表現が「に等しく」ではなく、「と等しく」であった背景要因について考える。

(33) 十七日の暁に、大弐の三位、「あからさまにまかでて、……立ちかへり参らむ」

とて、出で給ひぬ。暮るとひとしく参り給ひて、(讃岐典侍日記、上)

(岡崎 1980:2)

例(33)は先行論で、同時の意を表す「と等しく」の初出とされる例である。この例では、後続する動作(参り給ひて)が行われる時間が、「等しく」の節(暮るとひとしく)によって付加されている。つまり「連用修飾用法」に分類できる用例である。「等し」では、「と」が全体的に多い上に、「と」は「等し」の「修飾用法」に偏るため、例(33)の「等しく」は、「と」と組み合わさる確率が「に」より顕著に高い条件下にあると考えられる。

また、「等し」を比較述語の中に位置づけて見ると、「等し」だけが一般的に「と」に後続し、「同じ」などが一般的に「に」に後続するというこの時代の使用状況があった。これにより、同時の意を表す「と等しく」の特異性はさらに浮き彫りになる。今回の調査範囲では「に」「と」を取る「同じ」の「連用修飾用法」の用例が見つからなかったが、もし、そのような用例があったとしても、「等し」と同様の意味を表す場合、少なくとも平安時代において、前接するのは「と」ではなく、「に」の可能性が高い。そのため、「等し」だけが「と」と組み合わさる蓋然性を持っている。

5. まとめと今後の課題

本発表は、形容詞「等し」は「に」にも「と」にも後続するにもかかわらず、同時の意を表すのに「に等しく」という形式がないという言語事実について、平安時代では「等し」の比較対象を標示する「に」「と」が使い分けられていた可能性を考えた。その使い分けを明確に把握するために、「等し」「同じ」「似る」「異なり」「劣る」「勝る」を調査した。調査の観点として、まず先行研究を検討し、「に」「と」の前接名詞の特徴を観点として用例の観察に用いたが、有意義な差異を見出すことができなかった。

そこで、新たな観点を導入し、観察した結果、次のような使い分けがあることを明確にした。まず、「等し」とそれ以外の対立が見られる。「等し」以外の比較述語では、「に」の例がより一般的であり、「等し」では「に」「と」が用法を問わず使われるが、「と」が全体的に多かった。さらに、「に」「と」を用いる「等し」では、「に」は「非修飾用法」に偏り、「と」は「修飾用法」に偏っている。この観察は、同時の意を表す接続表現として「に等しく」が成り立たなかったという史的事実の背景に説明を与えるだけでなく、「等し」を比較述語の中に位置付けて見ることで、順接条件を表す接続助詞「と」の成立における類語との相違、「と等しく」の特異性も確認できる。

しかし、「に」「と」の使い分けの一端が明らかになった一方、なぜ「等し」と「等し」以外、「修飾用法」と「非修飾用法」の間に対立が存在したのか、そのような対立について、資料の性質がどう関与しているのかなどの問題も現れた。全て今後の課題としたい。

使用データベース・テキスト

- ・「日本語歴史コーパス (CHJ)」で時代を「平安時代」に限定し、次の検索方法で検索（用例は目視で採取）：キー：語彙素="等しい" (2025/1/15 閲覧)、キー：語彙素="同じい"、"似る"、"異"、"劣る"、"勝る"；前方共起：書字形出現形="に"、"と"；キーから 5 語以内 (2025/7/24 閲覧) ※「等し」の用例は陳（投稿中）の資料を使用しているので、検索方法は他の比較述語と異なっている。※CHJ の底本：「新編日本古典文学全集」「古典選集本文 DB 正保版本「二十一代集」「翻刻註解<下>」
- ・「新編日本古典文学全集」小学館：ネットアドバンス「JapanKnowledge Lib」
<https://japanknowledge.com/lib/search/basic/> 詳細（個別）検索、キー「等し」「斉し」「均し」(2023/12/29 閲覧)、「ひとし」(2025/3/29 閲覧)、「{に/と} 同」「{に/と} {異/こと}」(2025/5/26 閲覧)、「{に/と} {は/も} {異/こと}」(2025/7/28 閲覧)、「に似」(2025/7/21-22 閲覧)、「{に/と} {似/に}」「{に/と} {劣/おと}」(2025/7/22 閲覧)、「{に/と} {勝/まさ}」(2025/7/23 閲覧)、「{に/と} {えしも/は/はこよなく/も} {勝/まさ}」「{に/と} は {劣/おと}」(2025/7/27 閲覧)、「{に/と} {も/をさをさ} {劣/おと}」「{に/と} {いとうよう/いとよく/いとよくも/かは/こそ/ぞ/は/も/や} {似/に}」(2025/7/28 閲覧) ※「JapanKnowledge Lib」による、格助詞と比較述語の間に他の語が介在する用例の検索では、CHJ の検索結果を参考した。CHJ の調査では、各比較述語と格助詞との間の介在語は次のようである。ほとんど全ての比較述語が「は」「も」の介在語を持つため、全ての比較述語に対して検索した。「は」「も」以外の介在語について、2 件以上ある語を対象に検索した。全ての介在語を網羅的に検索していないが、検索対象外の介在語は少なく、本発表全体の結論に影響しないと考えられる。**【等し】**（合計 3 件）：「こそ」2、「いと」1；**【同じ】**（無）；**【似る】**（合計 76 件）：「いとうよう」5、「いとよく」6、「いとよくも」2、「いみじう」1、「か」1、「かは」4、「こそ」5、「こそいみじう」1、「ぞ」2、「ぞ、いとうよう」1、「なむ」1、「は」14、「も」29、「もいとよく」1、「もなどか」1、「や」2；**【異なり】**（合計 9 件）：「は」6、「はいと」1、「はなほ響き」1、「も」1；**【劣る】**（合計 44 件）：「いたう」1、「こそ」1、「さえぞ」1、「なほ」1、「は」10、「も」22、「もいたう」1、「や」1、「やは」1、「わがたもところ」1、「をさをさ」3、「我」1；**【勝る】**（合計 42 件）：「いくらも」1、「いますこし心寄せ」1、「いま一際」1、「えしも」2、「きりや千重」1、「さへもこそ」1、「は」16、「は、こよなく」1、「はあれこそ」1、「はいと多く」1、「はえ」1、「はこよなく」2、「は多く」1、「も」9、「もどう」1、「も数」1、「恋は」1

参考文献

- 岡崎正継（1980）「順態接続助詞「と」の成立について」『国学院雑誌』81（3）pp.1-11
 小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
 此島正年（1966）『国語助詞の研究：助詞史の素描』桜楓社
 小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
 阪倉篤義（1971）『講座国語史 3 語彙史』大修館書店
 鈴木泰（1975）「中古に於ける動詞「ナル」の用法と助詞「ニ・ト」の相関」『国語と国文学』52（2）pp.56-71
 陳星宇（印刷中）「接続助詞「と」の成立における「と等しく」の固定化について」『名古屋大学国語国文学』118
 山田孝雄（1913）『平安朝文法史』東京宝文館
 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』株式会社宝文館